

さまよえる玄冬期—根室逃避行

川口幸宏

(1)

職場外の所用をすませふと気がゆるんだ隙に、ある誘惑の心が湧いてきた。今から30年近く前に訪問したきりだが、どうにも消化不良のままの土地がある、その地に出かけてみたい！職場の仕事を放り出すわけにはいかないから、仕事と仕事の隙間を狙っての試み。思いたったところは根室。かなりの強行軍を覚悟しなければならない。果たして今のぼくにその体力があるだろうかと懸念もしたが、「玄冬」期をさまようままにさまようことこそが、精神の安定に繋がるだろうと、根室行きを決行することにした。

釧路まで飛行機でそれからJRに乗り継いで根室まで、というルートがすぐ頭に浮かんだ。いや待てよ、かつての消化不良を今ごろになって、完全消化あるいは新しい発見を求めようというのであるから、かつてのルートでは好ましいはずはない。札幌まで飛行機それから釧路・・・etc.。さまざまに思い付くルートの中から、この強行軍にふさわしい新しいルートは中標津まで飛行機、そこからバスで根室入りであった。中標津線は羽田からANAが1日1往復だけ出している。根室行きのバスはそれと連絡している。このルートでは、乗り換え時間待ち時間を入れて、およそ4時間ですむ。余談だが、陸路だけでルートを選ぶと最短で約20時間かかることが分かった。とても魅力のあるルートではあるが、今のぼくには、その暇も体力もないので断念せざるを得ない、いつかは実現したいと思うのだが。

ところで、かつての根室訪問は、1週間にわたる北海道巡回講演の際のことであり、夕方根室駅に到着しそのまま講演会場に連れて行かれ、2時間しゃべったあとは主宰者による会食に招待され、そのまま宿に連れて行かれ、翌朝車が迎えに来て納沙布岬、知床岬を案内され、夕方の列車に乗せられ・・・という具合で、ぼくという主体はただしゃべっている時だけ、根室をぼくのこの体と心で確かめたわけではなかった。しかも、「もっとも根室らしいところをご案内します」という行き先は両の岬。確かに北方領土問題やアイヌ問題を実感できたという意味では有意義ではあったが、ぼくにとっての「根室らしさ」というのはそこに住む人々の情念であり生活力の具体であるので、消化不良というこだわりが残り続けたのである。

「残りただ1席のみ」とのアナウンスの空席を確保し、「根室駅から歩いて2分」の1泊2食付きの旅館を確保し、北への「逃避行」の決行とあいなった。「桃飛行」であればまさに深層心理そのままとなるのだが、そうやすやすとは現実が動いてくれない。せめて「逃避行」の実現だけでもよしとしなければ。

飛行機は満席。1席だけ空いているというアナウンスが嘘ではなかったことを知る。大半がリタイア組とおぼしき年格好である。途中機内で「どなたか、医師免許か看護婦免許をお持ちのお客様はいらっしゃいませんか。」とアナウンスが流れたのには、つい2

ヶ月ほど前に倒れた身としては、いたって同情に値する出来事であった。幸い、30分ほど後、「気分が悪くなられたお客様は回復されましたのでご安心下さい」とのアナウンス、続いてぱらぱらとではあるが客室から拍手が起こった。しかしまあ、これからお出かけのように、飛行機を降りたらどうなさるのかしら、と心配する心は、ひょっとして我が身に対する不安感から起こったのであろうか。

満員の機内の客が根室まで向かうならばバスはすし詰め間違いない。……が、根室行きの路線バスにはたった6人しか乗らなかった！残りのほとんどは、観光バスご一行様となり、ぼくの乗るバスとは違い立派なバスに乗りこんでいった。彼らはこれからどこに行かれるのだろうか。

午後3時前に根室着。さっそく町中を歩き回りたいのだが、あいにくと雨。傘を持ち合わせていない不幸も手伝って、そそくさと駅前旅館へと向かった。「今日はお客様お一人様ですので、ゆったりとおくつろぎ下さい」との宿の主人に言われても、ぼくにあてがわれた床の間無し6畳の和室内と、5人も入れば満員となる「大浴場」、それに通行する廊下とロビーしかぼくに許される自由はない。夕食は洋風テーブルが並ぶ中でぼつんとぼく一人。酒は飲まない、テレビも見ない、食事しながら新聞は読まないの、ナイナイ生活に馴染んでいるぼくとしては、黙々とおかず6品付き食事をいただくしか他には方法がないのである。孤食には日頃の食生活で慣れてはいるけれど、それらの日々は、それでも他のテーブルには多くの客がおり、賑やかな音の中の孤食である。宿でのまさにひとりぼっちの食事には、のびのびなどという精神は働かない。さっさと片づけ、部屋に籠もり、仕事先で勝手に自分に宿題として課したある作業を進めた。夜遅くになって雨が上がり、窓ガラスの向こうには満月が上がっていた。

眩しいほどの明るさに目が覚め、慌てて飛び起きた。カーテンを引き忘れて眠ったために外の光が丸ごと部屋に入ってきていた。時計を見ると、何と午前4時！まだ夜中じゃないのさ。なるほど、日本で一番早く太陽が昇る土地、というキャッチコピーは偽りではなさそうだ。もう一度布団の中に入って眠ろうと努めるが、いったん目覚めてしまうと、「玄冬」期の身の悲しさ、眠りに誘い込まれることはなかった。7時半の朝食まで「宿題」の続きとなる。

(2)

根室の人々は、多くが、きちんと区画整理された街に住んでいる。根室の情念や生活の具体を知りたいければその町中を訊ね歩くしか手はないだろう。インフォメーション・センターでガイド・マップを手にし、どこをどのように歩くか、地図上でまず探索した。よく分からない。こうなれば気の赴くまま、街の様子のを伺いながら散策しよう、うまくいけば会話の機会が得られるかも知れない。

残念ながら町中で会話の機会を得ることはなかったが、非常に興味深いものに幾つか出会うことができた。その一つが、車用の行き先案内がロシア文字で示されていることであった。もちろん日本語案内があるのは言うまでもない。少なくとも、ぼくが滞在した延べ

3 日間、我が同胞とおぼしき人以外にすれ違うことはなかった。地名のロシア文字表記だけ



ではない、支庁などの案内板にはロシア語が並んでいた。海上 4 km 先は現ロシア領土。北方領土返還の看板も町中至るところにある。公共施設には必ず「北方領土は日本固有の領土です」のコピーが掲げられている。沖縄のアメリカ化、北海道のロシア化—これは、あくまでも、文字・言語表記のことを言っている—。我々「内地」の者、いや我々という言い方は止めよう、ぼくという人格の中にはほとんど意識されていない問題の中に、この地の人たちは日常の暮らしを送っているのだ。その他、「砂箱」の存在、「動物飛び出し注意」の道路標識などが印象づけられた。



観光化されていない港があれば是非行きたいと思い、イン

フォメーション・センターの窓口嬢に訊ねた。一瞬、怪訝な顔をされたが、根室港という案内をいただいた。歩いて 45 分程度。途中で小さなお菓子屋さんに寄り「道明寺餅」（桜餅）とお茶を買い求めた。昼食代わりにするためである。店のおばさんが「これは昨日で賞味期限が切れてますけど」と買うのを止めなさいと忠告をしてくれたが一だったら、店に並べなければいいのにな、と思ったのは、店を出てからであったのだが—、「ぼくの胃は、賞味期限とは無関係に出来てますから」と 420 円を払って買い求めた。潮風に吹かれながらいただく桜餅の味はなかなかのものである。

なるほど、観光客などより付きはしないような漁港である。廃船、廃材があちこちに野積みになっている光景に、まず、心引かれた。「いい人でしたネー」「チーン」の様子そのものを感じさせる。朽ち果てたトモに手を添える。太陽の熱を吸い込んでいた。赤錆びた廃錨の山、絡みに絡み、破れに破れた漁網の束などなど。一つひとつかつては人々の暮ら



しの支えであったものだが、すでに「捨てられて」いる。それらの野積みの海よりも、今度は何時出番だろうか、と思われるほどに野ざらしされ続けたであろう「玄冬」末期の幾艘もの船。それらが現役であるらしいと思われる証拠は、船体に書かれた船の名前文字が新しく上書きされているからである。

それらの「地域」の向こう側で、人々の活気がみなぎっていた。横付けされた船からクレーンで吊り上げている。あるいは人手によって運び出されている。何かの水揚げのようである。カメラを抱えてそこに寄ると、ホタテ貝で一杯になった箱が船から陸に揚げられていた。ぼくより人生を重ねたと思われる、汐で焼かれたたくましい顔の持ち主が水揚げを差配していた。陸の上では二人の若者がホタテ貝の箱を力一杯引き寄せる。何度も何度も繰り返すその作業に、ぼくは、そこに生きてきた、そしてこれからも生きて行くであろう、人々の情念の強さを感じた。

時はどれほどに流れたことだろう。ぼくは「剥げ落とす」ことを「玄冬」期だと考えていた。しかし、「持続する」こともまた、人生を連続させていくに必要な「いのちを保つ」営みなのではないか。海と陸の狭間で働く男たちを眺めていて、そう率直に思えたのである。ホタテの箱の上で、カモメが二羽、羽を休めていた。いや、彼らは、食餌行為のために、ホタテの上に止まって隙を狙っていたのである。

「玄冬」期は人生を捨てる時期なのではない、生き、生き続けようとする時期なのである。今回の旅は、恐らく、ぼくの人生エネルギーを改めていく食餌行為に類するのであろう。

(2006 年作)